

## 横田 拓也氏講演「北朝鮮よ、姉を帰せ！」

皆様こんにちは。

ただいまご紹介いただきました、家族会事務局長の横田拓也と申します。

横田めぐみの下の双子の弟の1人になります。一卵性の双子ということで、とても皆様方とか、報道の皆様からですね、どちらか分からないほど似ているので、今日はそのうちの拓也の方が、お話をさせていただきます。

本日は本当にこの連休の中、またコロナ禍で制約が大変多い中お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

また、日頃からこの北朝鮮による日本人拉致問題に対してですね、大変深いご理解と、ご支援をいただいていること、誠に申し上げます。ありがとうございます。

私自身はですね、約24年、25年ぐらい前に、福岡で勤務をしていたこともあって、とても好きな九州で、こうして皆様方の前でお話をさせてもらうことがすごく、力強く感じているのと、あとこの半年ぐらいは、このコロナの制約でこうした集会や講演というのが開くことができなくて、情報の発信もなかなかすることができなかったわけですが、その前は、2018年の12月に福岡の直方市、九州でいうと、去年の12月に熊本の方でお話をすることができて、一歩でも、そしてお1人でも多くですね、直接訴えることができるように活動してきたわけですが、今日本当にもう半年以上ぶりにですね、こうして、皆様方の前でお話をさせてもらうという形でございます。

先週の11月14日の土曜日、実は父・滋の誕生日でした。

その翌日が先ほどビデオでもご覧いただいたと思うんですが、15日が、めぐみが北朝鮮の職員たちによって拉致された事件の当日ということで、父の誕生日の翌日に、姉が拉致されたと、そういうような暦になっています。

父は6月5日に2年間、川崎の病院で闘病をしていたんですが、その闘病もですね、本当に長く辛い時間だったんですが、本当に姉と再会することができずにですね、87歳という年齢で他界をいたしました。

これまで全国1300回以上の、こうした講演や集会の中で、訴えさせてもらって、そして皆様方から、全国1435万筆以上の、救出活動の署名をいただきまして、本当に多くの方々に支えられ助けられ、この問題が自立的な国民運動になったことをですね、重ねて、父に代わってお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございます。

実は今日、本当私もこのビデオを一緒に見ながら、というふうに思っていたんですが、実はこの、特にアニメのビデオは、私実は最初から最後まで1度も見たことがなくて、本当に昨日のようなことであり、そして、本当に内臓をえぐり取られるかのように、すごく衝撃的な内容で、これを見てしまうと講演とか集会で平常心を持ってお話しすることができなくて、どうしてもわがまま言わせてもらって、中座をするというか、違うところで、場所を移して聞いていたんですが、本当にそれぐらい、自分にとっても家族にとっても残酷で辛い

内容です。これが現実、私達横田家の身の上に降りかかっているということでございます。

改めて横田めぐみの拉致事件を中心にお話をして参りたいというふうに思っています。

今から 43 年前の 1977 年の 11 月 15 日に、私の姉横田めぐみは北朝鮮の作業員たちによって拉致をされました。

日本人拉致の被害者は、日本国内から拉致されたケースや、海外で甘い言葉にだまされて拉致されたケースと、いろいろな事例があるわけですが、私の姉は新潟市の寄居中学校というところで、バドミントン部に姉は入っていたんですが、その部活の下校途中に、北朝鮮の作業員たちによって日本国内から、拉致をされました。

拉致問題、人権問題であり、日本国内から拉致をされたということは、主権問題であるということも私たちは忘れてはならないと思います。

皆様方から見て何となくの、模式図を申し上げますと、こちら側が陸側だとするとこちらに寄居中学校という学校があって、私の家があって、皆様方から右手の方にですね日本海があるという風な構図です。

日本海から自宅まではもう徒歩で 5 分ぐらいのところの近さにありまして、その日本海と自宅の間に、防風林の松林があると、そういうふうな形です。

私も九州に住んでいたことがあって、九州の空というものを知っている上でお話し申し上げますと、それと比べると、新潟の日本海の 11 月の夜の黒さというか、空っているのはものすごく漆黒の暗さ、黒さです。

そして日本海は風に吹かれてその海鳴りというか、防風林に吹きつけるその風の音というのは本当に特に夜になると、小さい子供はもう怖くて寝れないといったような、そういうような、雪と黒い空が混じった、事件がなくてもちょっと怖いような雰囲気があったんですが、そんな位置関係の中で起きた事件です。

中学校から海に向かってちょっとこう上り坂なんですけど、後ほど警察の方が大量動員されて、当日、それ以降も大捜索をかけて、警察犬も何頭も出て調べたんですが、わずか自宅の家、本当まだ目と鼻の先のところで警察犬が、匂いを見失ったということですから、それは実際それが場所かどうか分かりませんが、本当にわずかなところで、家にたどり着くことができずに、作業員たちによって拉致をされたと、こういうような話です。当時中学 1 年生、13 歳という若さの女の子が拉致された事件です。

横田めぐみは本当に性格でいうと明るくて、しっかり者で、読書が好きで、動物が好きで、食卓の中では本当に話題の中心で友達の中でも人気者。当時もバドミントン部で選手になるかならないかってことで本当に悩んで、本当に前向きで建設的で明るいひまわりのような、花で例えるとひまわりのような黄色いオレンジ色っぽいような、そんなしっかり者の姉でした。

そういう明るい姉が突然いなくなってしまったというのがこの問題になります。

今日は皆様方のお手元にも、日本政府が作成しているこの拉致問題のパンフレット、これもちょっと一緒に見ながら、お話していきたいと思っております。

先ほど、陸側の寄居中学校と日本海側のその関係を、ざっくりお話し申し上げたんですが、寄居中学校と自宅の間に、当時からも廃墟だったサボイホテルという、ホテルがありました。これはもう、昼間でもお化け屋敷みたいなホテルですから、近寄ることも怖いし、中に入るなんてもう想像もできないような廃墟のようなホテルがあったのですが、その当日、私と弟の哲也2人は、夕方ということもあって、自宅でコタツに入ってテレビを見ていました。いつもなら帰ってくる時間帯に姉が帰って来なくて、母が心配して、中学校まで様子を見に行きました。

そうするともう部活終わっていて、ママさんバレーが始まっていて、ママさんバレーの方に聞いたらもう終わっていますよと、いうことで、どこが一本道なのですれ違うことしかないの、迷うってことないと思うのですが、もしかしたら友達同士で道草してってことで、はぐれたのかなってこともあって、1回家に戻ってきたのですが、そこでも姉が帰って来なくて、少し様子が変わらないかということでその当日、私の弟哲也が母を真ん中に両手で、3人で繋がってですね、自宅からサボイホテル、そして寄居中学校の方に探しに行ったというのがこの拉致事件の始まりです。

昼間でも怖かったそのサボイホテルに、私が懐中電灯を持ってですね、今では明るい懐中電灯ばかりしか売っていませんが、当時は本当に豆電球のような、真っ黒な懐中電灯ですから、それを片手にですね、廃墟のホテルにも本当に決死の覚悟で、探しに行きました。廃材が転がっていました。何も手がかりがありませんでしたし、もう2階とかその奥に進むこととても怖くて、行けなくて、そのままその廃墟のホテルから出て、寄居中学校の方に行っても何も手がかりがなく、そしてまた自宅に戻っても、姉は帰って来なかった。

これが本当にこの43年間、苦しんでいる拉致事件の当日の様子です。

私たちは、特に両親はですね、姉がなくなったことが誘拐ですとか、何らかの事故、事件、そして13歳ですから一般的じゃないと思うのですが、例えば、一般的に言われている駆け落ちみたいなケースも色々なことを考えて、警察に捜索願や探しに行ったりしました。

母はよく雑誌で、めぐみ似たような少女が出ていると、めぐみじゃないかと思って出版社に電話をして、この写真はどこで撮った写真ですかといったようなことを、何度か聞いていたことも横で見えていましたし、テレビに映っている映像の中にめぐみに似た少女が映っていれば同じようにテレビ局に電話をして、これはどこで撮った映像ですかといったようなことを問い合わせました。何度もそういう、自分でできることは、両親はやっていたと思います。

中には、私たちの家に、いたずら電話、身代金目的のいたずら電話だったり、無言電話も何度もありました。もしかしたらその無言電話の中には、めぐみが、北朝鮮当局の人間に絶対しゃべるんじゃないという前提で、親の声を聞かせるために、やっていたのかもしれないし、もしくは、日本国内に隠れていた北朝鮮の職員たちが、私たちの様子がどんなことかを探るために、電話してきたのかもしれない、その真実は分かりませんが、そういったいたずら電話、嫌がらせ、無言電話、ありとあらゆるものがその当時の私たちの家に電話がか

かってきました。

11月15日のその当日の夜、結局姉が帰ることはなく、そして私たちまた9歳の弟ですから、小さいですから、寝ました。翌朝になっているかと思って探したけども、部屋には姉はいなかった。私たち、特に弟の2人にはですね、この43年の中で、一番この当日の夜と翌日の朝、そしてその夜、2、3日後のこの1週間ぐらいがですね一番辛かった1週間です。

何でいないんだろうと。昨日まで居て、今日まで居たのになんで居ないんだろう、帰って来ないんだろう、どこにいるんだろう、そういったような辛い始まり、この1週間本当に今思っても辛い時間でございます。

もし姉にこの拉致事件がなければ、本当に明るい未来を描けたらと思います。自己実現が図れたと思います。

私はよく、自分も普段はサラリーマンやっていますから、いろんな女性の働いている方とお会いしたり、町で歩いている方を見ると、姉も本当に何もなかったらこうして働いていたんじゃないかなあとか。もしくは、中学1年生で拉致されたわけですから、勉強が大好きで本を読むことが大好きでしたから、高校に入って大学に入って、就職をして、自分のやりたい仕事を社会貢献のためにして、恋人ができて、生活をして、子どもをもうけて、ごく当たり前のことをできたんだろうと思います。

公園とかで家族の3人4人のにぎやかな声が聞こえている声を見ると、こうして姉も本当に、普通の幸せな家庭を築けたんだろうなと思うことが、いつもあります。でもそれができなかった。

北朝鮮の暴力的な一方的な破壊行為によって、彼女の人生は狂わされてしまった。本当に許すことができない現実です。

当時日本国内では、北朝鮮という国が、専門家の方はもちろん分かっているでしょうけれども、どこにあつて、どういう国かということあまり知られてはいませんでした。

それは私たち横田家においても同じでした。

日本の当時の報道機関が、北朝鮮とは呼ばなかったことを皆さんもご存知かもしれませんが、当時は、わざわざ「朝鮮民主主義人民共和国・北朝鮮は」といったように断りを入れて、この問題を腫れ物に触るかのように、北朝鮮をある意味、大事にしながら報道していたそんなような歴史もあったわけです。

姉が北朝鮮に拉致されてから脱北した元工作員の証言によって、姉が北朝鮮によって拉致されたということが明るみに出てきました。

先ほどのアニメのビデオの中にもあったと思います。控え室の方で音を聞いていてちょっと本当に心が動揺しましたがけども、姉は工作船の中に、船の底に押し込められて、鍵のかかった扉の中から開けてくれと、お母さん助けてと泣き叫んでいたと。その指先は血で染まっていて、ということも工作員の人が証言してくれました。

13歳の右も左もわからない少女が、男でも怖いと思いますけど、女の子がそういう暴力的な中に追い込まれて、恐怖の中にいる。本当にそれだけ思うと、今でも自分の内臓がえぐ

られそうな、辛い気持ちになります。どれだけ姉が怖かったらうかと、絶望の淵に追いやられたかと思うと、本当に辛くてなりません。

ちなみに、その船が一緒かどうかは別なんです、東京の横浜ですね、神奈川の横浜にですね、海上保安庁の施設があります。そこに北朝鮮が以前、船、海上保安庁が追っかけてですね、彼ら自身が自沈、自分で沈んだ船が展示されています。

皆様の中にも、神奈川の横浜ですねご覧なつた方もいらっしゃるかもしれませんが、その様相が本当にびっくりするような光景です。もちろん船が錆びているんで、当時動いていた船とは雰囲気が違うんでしょうけども、船の底をですね、後ろのところからこう扉が開いてですね、底からさらに小さい工作船が出入りするよう、さらに底から出るスクーターとかっていうものとか、大きな武器とかが全部並んでいるんです。

その船で拉致されたわけじゃないでしょうけども、そういったところにもし自分が閉じ込められて、どんな気持ちになるだろうかって思うことをリアルな現物として見て欲しいなと思っています。

話だけじゃなくて、実際こういうことが日本で起きた、もしくは起きている、自分がそういう目に遭ったらどうなのかということを見る、いい材料になるのかなというふうに思っています。

そんな中両親は、私たち残された双子の子どもの中で、動揺したり、涙を流すことはありませんでした。私の記憶の中には、少なくともありません。

ただ、後に聞いた数年前の話によれば、母は私たち2人の双子がですね、登校した後に畳を掻きむしって泣き叫んでいたって本人が言っていました。私たちの知らないところで、本当に苦しみ耐え抜いて、時間を過ごしていた。

そういう母の話を聞いたときに、後になって私も本当に辛い気持ちになりました。聞けば聞くほど北朝鮮のことを絶対に許してはならないと思っています。

父は残された双子の弟、私たちがですね、道に迷ったり、グレたりですね、そういうことがないようにってこともあって、犬を飼ってくれました。ただ、犬は飼ったものの父がその犬をすごく可愛がって、毎日朝・夕方ですね、夜ですね、新潟雪が多い土地柄ですが、雨が降ろうが雪が降ろうが、毎日散歩に出かけて父は行っていました。

私も一緒に行くことがありましたけども、父はもしかしたらその犬の散歩ってということが目的ではなくて、やっぱりその日本海とか松林の中に入って、姉の形跡が手がかりがないのかなって探したんじゃないかなって今まで思っています。

私も一緒にいると散歩している時に、そんな小学校3年生4年生の自分でしたけども、姉の、例えば靴や似たような物が落ちてないかってことを、下を見ながら歩いていた自分がいたことも今でも思い出します。でももうその時点ではとつくの前に、北朝鮮の船に押し込められて、拉致されたわけですから、そこに手がかりがなかったとは思いますが、そういった中でですね家族が必死に歯を食いしばって生きていた。それが43年前の話です。

そしてこのパンフレットのですね、22, 23ページにですね年表があるかと思います。

これ一番左上が 1977 年の、私の姉をはじめとする多くの被害者たちが拉致された、この年表でいうスタートですね。一番右側が 2019 年 2020 年と形で繋がっているんですが、この左側のページの 1997 年に、家族会結成と書いています。私たち拉致被害者家族は、1 人では何もできないので、この家族会を結成をすることによってこの問題解決、被害者を救出するために家族会を結成しました。

その当時報道機関や、有識者の皆さんは「いや、北朝鮮がそんな拉致問題などを起こすはずがない」という論調を張っていました。私たちの真逆のことを言っていました。私たちは「北朝鮮がやったから助けてください」ということを叫んでいましたが、そういうことを論調として立ち上げていた、そんな時代です。

もしくは、報道の力っていうのは、やはりその真実を伝えることと、二つ目は間違っただけを伝えること、三つ目には取り上げないこと。

先ほど間違っただけの真逆のこと言ったというのは、間違っただけ 2 個目の報道の姿勢だと思うんですが、取り上げなかったことが、その三つ目の力が、この年表でいう一番左上の 1977 年のこの年かこの直後に、日本政府や警察や、報道機関が真剣に取り上げて北朝鮮に強く抗議して、全拉致被害者を取り戻してくれればですね、こんだけ長い年表、この 43 年の苦しみを味わうことはなかったと、今でも思っています。

事件っていうのは本当初動捜査が大事ですから、時間をかければかけるほど解決するのは難しくなりますから、この年表に色んなことが書かれていますけども、本当になぜこの最初のところで動いてくれなかったのかということは今でも悔みますし、それは大きな課題だと思っています。

そしてこの時に、国会の予算委員会で横田めぐみのことを取り上げるという話が出てきました。ちょうど私が福岡で働いていた頃の話です。

横田家の中で「いやそれはちょっと危険じゃないか」と、「実名報道に踏み切ってしまうと、北朝鮮は横田めぐみがいなかったものとみなすために、殺す可能性がある。絶対に実名公開をするべきではない」母と私と弟の哲也の 3 人はそういう意見で発言しました。

父は「そうじゃない。『新潟県の Y さんもしくは M さん』で取り上げてもらっても誰の関心も呼ばない。誰もこの問題に向き合ってくれない。リスクはあるけど、『横田めぐみ』という名前を上げなきゃ駄目だ」と絶対譲りませんでした。

ものすごく長い時間、家族会議というよりはまあ喧嘩じゃないけどすごく、厳しい雰囲気の中で家族の中で話をした記憶がありますが、父はやはりそこは譲らずですね、「絶対実名公開するべきだ」と。ここ譲りませんでした。

でもその実名公開をしたことがですね、今日のこの横田めぐみという存在がですね、拉致問題のシンボルになって、世界がこの問題を認知している大きなスタートだったことを考えると、当時の父の判断ってのは本当に勇気ある英断だったなという風に思っています。

そして 2002 年の 9 月に事態が大きく変わりました。

年表にも 2002 年のところに日朝首脳会談ということが書かれています。ここで、当時の

小泉さんと金正日委員長が初めて向き合って、そしてその場で初めて、当時の金正日委員長が「日本人拉致は自分たちが行った犯罪である」ということを認めました。

本当に長く時間かかったと思います。もっと早く強く迫って、その答えを引き出していれば、多くの人が辛い人生を歩まなくて済んだと思いますが、ただ、現実はようやくこの2002年の9月に首脳会談の場で北朝鮮が犯罪を認めたということです。

それまでに私たちの叫びとは真逆のことを叫んでいた有識者たちは、あつという間にテレビのところから逃げ去って、逃げるかのようにいなくなりました。日本中がひっくり返りました。

「やっぱり北朝鮮が拉致していたのか」と。「そんなことするはずがないと思ったけどそんなに13歳の少女まで国内から拉致していたのか」ということを初めて知ることになって、当日の報道もすべてテレビ局、どのチャンネルを見ても、日朝首脳会談の様子が取り上げられていましたけれども、日本中がひっくり返った、ということでありました。

ただ残念ながら、北朝鮮は、本当に重い腰上げてこの問題が自分たちの犯行である、犯罪であるってことを認めたものの、生存組と死亡組と未入境、要は入ってきてないっていう三つのグループ分けをして、彼らにとって都合のいい仕分けをする形で回答してきました。私の姉横田めぐみとその死亡とされたグループの中に括られた形で回答を受けたわけです。

一方で、その首脳会談後に、5人の拉致被害者のご本人たちが帰国することができました。これは本当に日本国民の、本当に力強い支援と声が日本政府を動かして、北朝鮮に強く向き合ったことで、彼らがもう折れざるをえないってことが大きな力だったと思いますが、5人が帰ってくることができました。

このパンフレットの中にもですね、5人が羽田空港のタラップから、降りてくるシーンがあると思います。5ページの下でしょうかね。このところにですね、この写真では写っていませんが、私の父はこのタラップの下で、カメラを持ってこの5人たちを写していました。

もうこの日には、5人以外乗ってないってのは分かっていたものですね、父も母も、私も哲也も、もしかしたら一番最後の5人目の後に、横田めぐみがひょっこり降りてくるんじゃないかっていう期待を抱いていましたけれども、残念ながらそういうことはなくてですね、5人が降りてくるのを父はタラップの下から写真を撮って、「自分の子供はいなかったけどよかったよかった」って喜んでいました。

私や弟の哲也は先ほど申し上げたように、普段はサラリーマンやっているので、当時営業車の車に乗っていて、ラジオでそれを聞いていました。

弟の哲也は本当にもう、帰ってきた喜びと、でも一方で、姉のめぐみがいなかったことの悔しさ悲しさで、涙がもう止まらなくて、運転ができなくて、道路の側道で止まって泣いていたって言うていました。私も同じような状況でした。

帰ってきたことは本当に成果だったけれども、なぜ姉がいなかったのかと思うと本当にその当日、当時はですね、辛かった記憶があります。

そして北朝鮮は、その生存死亡未入境というその死亡のところをですね、とにかく既成事

実化したいために、あらゆる捏造したデータをですね、日本政府に提示するとともに、挙げ句の果てには横田めぐみの遺骨であると称して、日本政府を通じて私たちの横田家のもとにそれを出してきました。

先ほど冒頭申し上げたように、姉は本当に前向きで建設的で明るいしっかり者の姉ですから、彼らが言っているような自殺をするなんてことは到底考えられないような姉貴でした。

そういうこともあって「絶対にそんなことありえない。今すぐ日本政府は北朝鮮に抗議してくれって。調べてくれ」ってことをその場で日本政府に要請しました。

そして日本政府は、世界でも最先端のDNA鑑定の技術を持っていますから、それで出てきた答えというのは、他人の遺骨であったということです。

診断書も元々死亡年月日が異なっているし、他の被害者の診断書や証明書も全部捏造しているものしかなくて、死亡したという証拠なんていうものは何一つないんですね。

さらに私の横田家においては他人の遺骨まで持ってきて、この死亡とした事実を何とか突きつけて、横田家を諦めさせようと、幕引きさせようとしているのが彼らのやり方です。

彼らは13歳という少女を拉致した罪に加えて、北朝鮮に住んでいる誰かの骨をその人の尊厳を踏みにじって、私たちを騙し、日本政府を騙そうとして、今でもそういう行為を続けている相手、国家であると。そういうことを私たちは絶対に忘れてはならないというふうに思います。

両親は国内外で1300回以上、講演や集会をして救出を訴えました。

先ほどの中のビデオにもあったかもしれませんが、当時はその拉致されたことが北朝鮮ってことは分かっていませんでしたから、画板の上に署名用紙で活動してもですね、中には多くの方がもちろん振り向いてくれない時代はあったんですが、叩きつけるような方もいらっしゃいましたし、一方で私も街頭に何度も立ちましたけども、本当に腰ぐらいの小さい女の子ですね、小学生か幼稚園生、小学生だと思んですが、その子が私のとこにトコトコやってきて、100円の、多分お小遣いだと思んですが、「頑張ってるね」って言って入れてくれたりとか、そういう本当に多くの人に、辛かった時もあったけど、多くの人のかさや、力強さに支えられて、私たちは負けずに今日に至って、父は他界してしまったけれども、活動が続けられるのはそういうおかげだなと、いつも思っています。

息子の立場からは特に両親ですね、父ですね。もう動き詰めていますから、手書きの予定表を見るともう、毎日どこかに行っていました。

当時からも父に何度も言って、「もうこれで体壊して姉に会えなくなったら本当に本末転倒だから。例えば1週間何曜日は講演会や集会をお受けしないとか、もしくはこの月は神奈川や東京以外から出ないとかっていうふうに決めないと体壊しちゃうよ」って言ったけど、「そんなことは駄目だ」って。「やれることをやるんだ」ということで、動き続けてその結果が一つではないと思うんですが、やっぱり疲労がたまってしまうと、入院生活を強いられてしまって、会えなくて他界してしまったっていうのは、本当に本人の中では一生懸命頑張



ったと思うんですけど、子どもの私たちからすると本当に悔しいし残念だし、合わせてあげたかったなっていうのが今でも思っています。

そうして横田家に限らず、いわゆる親世代、私のような子どもの世代の中で、親世代のたちはもう本当に80歳代90歳代の人がいっぱいいますから、こうして例えば東京から九州とか、アメリカ政府に行くために14時間飛行機に乗って飛行、移動するなんてことがもうできない。最前線に立てないような、肉体的な状況にありまして、私たちがある意味もう家族ですからやらなきゃしょうがないんですが、そういう最前線でやることを引き受けざるをえないような状況になっているのが現実です。

家族のことだからやるけれども、でもこうしたことがですね、なぜ子どもの世代まで受け継がなきゃいけないのかって異常さを、分かって欲しいと思うし、当たり前のこととして日本政府は受け止めて欲しくないなと思っています。

私たちがなぜ最前線で戦わなくちゃいけないのかと、この問題は人権の問題であり、主権の問題であるから日本政府が国家が最前線に立つ話であって、なぜ私たち被害者が最前線に、しかも子どもの世代まで引きずって、この問題を当たり前のようにやらなくちゃいけないのかということを一方で疑問に持ちつつ、この問題をとらえて欲しいなというふうに思っています。

また北朝鮮問題というのは、この拉致問題人権問題のほかに、核開発を進めています。

弾道ミサイル、核開発、もうミサイル発射も、先ほどの年表の中でも何行も書いてあります。

米朝の間で行われた首脳会談の中でも、トランプ大統領が金正恩委員長に厳しく迫りました。「核開発やめろ」と。「この核の施設を凍結破壊しろ」というようなことを迫りました。

ただその中で、併せてアメリカ政府はですね、3度もこの「人権問題である拉致問題を解決しろ」ということも、自国の国益じゃないにもかかわらずですね、日本政府の立場に立って、金正恩委員長に直接説明しました。

金正恩委員長もそれは聞いていたっていうんで、もう逃げる、もはや逃げることはできないはずなんですけど、そうしたアプローチをこれまでも取ってきました。

ただその北朝鮮問題っていうのはやはりそういう人権問題以外にですね、こっだけ日本海挟んで近いところにそういう脅威を持った国があるということを一方で私たちは忘れちゃいけないと思っています。

米朝首脳会談の中では、核の問題を解決すれば明るい未来が描けるということをアメリカ政府のトランプ大統領は北朝鮮に伝えました。ただその時に、「アメリカ政府は北朝鮮には経済支援はしない」と、一方で伝えました。「その経済支援は誰がやるんだ」と。「それは日本政府がやるんだ」ということをアメリカ政府も日本政府も表明していました。

ただ日本政府が経済支援をするときの前提は、拉致問題が解決しなければならないということを前提に、その3者のプレーヤーが話していたわけなんですけど、残念ながらその米朝間の中で、インテリジェンス情報をアメリカが北朝鮮突きつけたものの、北朝鮮はそれを受

け入れることができずに、残念ながら決裂してしまいました。

この決裂したことで、日朝間の動きも自動的にと言っていいんでしょうけども、止まってしまっているというのが現状です。

また北朝鮮は最近、日本や国際社会が課している、もう過去最強の経済制裁によって、もう貿易の量が極端に減っています。さらにその上にですね、コロナウイルスのために国境封鎖して、物資の行き来がもうほとんどなくなってる状況です。

また最近では大型台風による水害があって、農業インフラや、家屋の倒壊によって、彼らの国にとっても三重苦の状態であります。

これまで例外とされていた平壤市内でさえも、電力供給や食料配給がもう滞ってるというような、目に見える影響が出てきているので、多分国民の動揺ははかり知れないものだと思いますが、そうした今辛い中に北朝鮮国内が置かれているというのが現状です。

そしてまた北朝鮮は、報道によればですけど、今度アメリカ大統領選挙がですね、決まった決まってないとかって今でも揺れています、金正恩委員長はやっぱり一対一のトップダウン型的外交展開ができるトランプ氏をですね、大統領になることを望んでいたと思いますが、今の報道の流れから見ると、バイデン元副大統領が次期大統領になるというふうな流れですから、先ほどの三重苦に加えてですね、四重苦が今から加わろうとしているわけです。

バイデンさんはですね、人権問題に厳しくアプローチするということですから、我々としては今後ですね、コロナ禍の問題がある程度環境が整わなくちゃいけません、改めて訪米をして、ホワイトハウスや国務省、国防総省、財務省、上下両院の議員さんたちにですね、この問題の重要性を訴えて、そして国際社会に訴えて、早期の拉致被害者救出奪還をしていく覚悟であります。

その北朝鮮が撃っている、例えば弾道ミサイル、大きさとか規模によって違うんですが、一発の発射に約8億円から4億円かかると言われています。

2500万人の北朝鮮国民の方々が、その8億円や5億円がなければ、どれだけ多くの人たちが十分な食料や、医療機関の体制が整えられて、失わなくてもいい命が助かるだろうっていうふうに今でも、私はいつも思っています。

本当に先軍政治を止めて、人権問題と核問題は彼らの国は表裏一体ですから、本当に改めて欲しいなと思っています。豊かな国の明るい未来を描くためにですね、「さすが」と言われるリーダーとなるのか、今まで同様に、人権蹂躪している独裁者としての名前を残して、歴史に名を刻むのか。金正恩委員長には判断をして欲しいなと思っています。

またこの拉致問題は日本人拉致被害者だけではなくて、韓国やレバノン、ルーマニア、タイといった多くの国々に跨っている、広範かつ大規模な人権問題であることも忘れてはなりません。

日本ではこうして本当に多くの皆様方にご理解いただいて、この問題を解決しなきゃいけないっていうムーブメントになってはいますが、やはり、海外の、今言ったような国の中で

はですね、この問題がやはり取り上げられてなくて、残された家族が本当に苦しんでいる方々があります。私たちは、こうしたご家族の方々ともですね、連携をしながら、日本人だけでなく、苦しんでいる被害者がみんな母国に帰って家族と再会できるように、力を合わせて頑張っていきたいというふうに思っています。

その上で、私たちが日本政府に、そして国際社会に、対北朝鮮に要求する水準、もう1回確認していきたいと思えます。

私たちが求めている要求の水準というのは、【全拉致被害者の即時一括帰国】ということです。「段階的に返してください、それはいいですよ」とは絶対言いません。「部分的でいいですよ」とも絶対に言いません。「君たちが拉致した全拉致被害者を返せ。そうでなければ私たちは絶対にあらゆることにイエスと言わない」ここの要求の水準が絶対に、日本政府は下げて欲しくないというふうに思っています。

そしてまた、一部の人がですね帰国、仮にできたとしてもですね、残された親世代の人たちが他界した後に帰ってきても、これ何の解決にもならないんですよ。

「それで解決したから経済支援をしてくれ」と言われてもそれ私たちは絶対に日本政府として北朝鮮に対しては「了解」とは言えません。

今元気なうちに家族が再会して、「長い時間かかったけど会えてよかったね」ということは言えないとそれは真の解決にはならない。このことも、北朝鮮、そして日本政府は忘れないで、しっかりと外交交渉して欲しいと思えます。

そして北朝鮮は、日本国内に対してあらゆる情報工作を仕掛けてきています。その流れに沿って、同じこと言っている報道機関や政治家の方がいらっしゃるのも知っていますが、彼らが今何を言っているかっていうと、「日朝両国に連絡事務所を置いて、何か一緒に探してみようじゃないか」と。「調査委員会を立ち上げようよ」と。「調査レポートを日本に送るから」ということを言って、何か前進したかのようなことをしましょうってことを言っています。

これ、とつても聞こえはいいんですよ。何か作れば、なかったよりいいんじゃないかってことを思う方多くいらっしゃるかもしれませんが、これ大間違いなんです。北朝鮮は拉致した被害者が24時間、誰がどこに何しているかっていうのを厳重監視下において、すべて監視して分かっています。

調査委員会とか、事務所なんか作らなくても、すべてリアルタイムで分かっているんです。

「連絡事務所を作って調査委員会を作りましょう」というのは、「彼らのことを知らない、もしくは死んでいる」と言っているのと同じなんです。「そうじゃない。そんなものを作らなくたって、君たちが拉致した被害者全員を返せ」ということを私たちは曲げないで要求していくこと。ここを間違っ、甘い言葉に誘われて「そうだねそうだね」とってことにならないように、注意しなくてははいけないというふうに思っています。

私の姉をはじめとする拉致被害者は今日も、これからもずっと「助けて欲しい」と叫んでいると思えます。その声なき声に私たちは耳を傾けなくてははいけないというふうに思っ

ています。

長い戦いの中で、有本恵子さんのお母さんの嘉代子さんや、私の父の滋。本当にそれの他にもこれまでに何人も、高齢のために亡くなった方いらっしゃいますが、もう二度とこういう不幸なことは起こしたくない。本当に早期に問題解決して欲しいなと思っています。

そしてもう時間もそろそろなので、できれば皆様方をお願いをさせていただきたいことがあります。

それは今日、私がこの場で直接お話しさせてもらったことを「今日めぐみさんの弟の人が、福岡に来て話聞いてきたよ」ということを、ご家族や友人や連休明けの会社の職場で、一言でもいいからお話をして欲しいんです。そのことがやっぱり情報が伝わることだと思います。

先ほど年表の中にもお伝えしましたが、日朝首脳会談でようやく事態が展開した 2002 年から、今もう 18 年経過しているんです。今の中学生のお子さんとかも知らないんですね。その子達にもやはり、「こういうことがまだ解決できてなくて、君たちと同じぐらいの年頃の子どもが拉致されて帰って来られない現実があるんだよ」ってことを言うだけで、この問題が風化しない、大きな原動力になるし、この声が 1 個に高めていくことが、北朝鮮にはない民主主義の力だと思っています。これが政府を動かして、外交を動かすのに強く、生きてくると思いますのでぜひ、これをお願いさせてもらえないかなというふうに思っています。

亡くなった父はですね本当にまだ生きているところに、もし姉が帰国したら、当時最先端だった六本木を見せて、連れて見せてあげたいって言っていました。まあその夢は、残念ながら叶わなくなってしまったんですが、「こんだけめぐみがない中で日本は進化したんだよって、変わったんだよってことは見せたいな」なんてことをよく言っていました。そして母は、「そんなことじゃなくて、2 人で誰からも邪魔されないで草原の原っぱで 2 人空を見てゆっくり雲が流れているのを見て、『やっと辛い時間から解放されてよかったね』っていうのを見せてあげたい」ってことを母は言っていましたし今でも言っています。

両方とも本当にそうさせてあげたいと思っていますが、ただ本当にもう母も 84 歳で、そんなに縁起でもないですけど、時間があるわけではないんです。

待っている親世代の年齢的な残された時間もなければ、本当に過酷な今日生き抜くのに必死な当事者たちにも時間がないわけで、一刻の猶予を争う真剣深刻な人権問題であります。

日本政府は本当にこの問題に真剣に向き合って、北朝鮮そして対アメリカと同盟強化さらに図ってもらってですね。1 日も早い家族再会、拉致問題解決を図って欲しいと思っています。

私たち家族はもう負けるわけにはいかないし、歩みを止めるわけにはいきません。

こうして、直接皆様方に言葉で訴えかけることが、私達にはそれしか武器がありませんから、絶対に諦めずに、姉が帰ってきたときに、最初の一言目はもう、「お帰り」じゃなくて

「ごめんね」と言うしか私はないのかなと思っていますが、本当に抱き合って、自分の中の夢では、姉が返ってきたタラップのところで日本の日の丸の国旗をくるんであげて、「よく頑張った」ってことを言って、そういう夢のある将来を描いて、私はこれからも活動していきたいと思っています。

これからも皆さん方のご支援を引き続きお願いしたいと思います。

よろしく願いいたします。

ありがとうございます。

※講演内容について、できるだけ忠実に作成しております。